

<研究ノート>

後期古英語における接続法の用法：命令的接続法について
— 『ウェストサクソン福音書』「マタイ伝」を資料に—

**On the Use of the Subjunctive in Late Old English
with Special Reference to the Mandative Subjunctive
in “The Gospel according to St. Matthew” of the *West-Saxon Gospels***

浦田 和幸

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

URATA Kazuyuki

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 接続法の語形

2. 命令的接続法：現在時制

2.1. 接続法

2.1.1. トリガー：動詞

2.1.2. トリガー：名詞

2.1.3. トリガー：形容詞

2.2. 接続法／直説法

3. 命令的接続法：過去時制

3.1. 接続法

3.2. 接続法／直説法

おわりに

補遺

キーワード：古英語 接続法 命令的接続法 『ウェストサクソン福音書』

Keywords: Old English, subjunctive, mandative subjunctive, *West-Saxon Gospels*



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

小論では『ウェストサクソン福音書』(c. 1000) の「マタイ伝」を資料に、後期古英語における接続法の用法として、現代まで命脈を保つ「命令的接続法」(mandative subjunctive) に焦点を当てて検討する。その際には、形態的には接続法／直説法の区別はつかないものの、接続法が用いられる統語的環境に現れ、命令的接続法と見なしうる事例も調査の対象とする。適宜、翻訳元のラテン語訳聖書(『ウルガータ聖書』)を参照し、また、同じく『ウルガータ聖書』からの翻訳である後期中英語の『ウィクリフ派聖書』(後期訳(c.1388))と通時的に比較する。

後期古英語の『ウェストサクソン福音書』の「マタイ伝」に関して得られた結果を、後期中英語の『ウィクリフ派聖書』(後期訳)の「マタイ伝」に関して筆者が既に行った調査結果と対照すると、主に以下の点が浮かび上がる。

(1) 後期古英語の『ウェストサクソン福音書』では、後期中英語の『ウィクリフ派聖書』(後期訳)に比べて、<命令的接続法現在>の用例数自体はほぼ同等である。しかし、接続法過去の語形はいち早く衰退したため、<命令的接続法過去>の用例は『ウィクリフ派聖書』(後期訳)の「マタイ伝」においては皆無であり、統語的環境から接続法と見なしうる<命令的接続法／直説法過去>の例も全く観察されない。

(2) 『ウェストサクソン福音書』においては<命令的接続法過去>で表現されている場合、『ウィクリフ派聖書』(後期訳)では命令的節(mandative clause)内で法助動詞が用いられたり(例: *should*)、あるいは、非定形(non-finite)の不定詞句によって表現されている。

(3) 『ウェストサクソン福音書』における命令的接続法の用例を『ウィクリフ派聖書』の該当箇所との表現と対比することにより、定形(finite)から非定形(non-finite)へという英語の文構造の通時的变化の一傾向を実例により観察することができる。

Abstract

This article examines the use of the subjunctive, particularly the mandative subjunctive, in Late Old English, based on the Gospel according to St. Matthew in the *West-Saxon Gospels* (c. 1000), as part of the present author's diachronic study of the subjunctive in English. The article analyzes a whole range of the uses of the mandative subjunctive, taking account of non-distinct subjunctive/indicative forms used in mandative contexts. The Latin *Vulgate* from which the Old English version was translated, and the Late Middle English *Wycliffite Bible*, which was translated from the *Vulgate* in the late fourteenth century, are referred to in comparison with the *West-Saxon Gospels*. The mandative subjunctive found in the Gospel according to St. Matthew in the *West-Saxon Gospels* reveals such features as:

(1) While there are almost the same number of occurrences of the mandative 'present' subjunctive in the West-Saxon version and in the Wycliffite version, there is none of the manda-

tive 'past' subjunctive or non-distinct subjunctive/indicative used in mandative contexts in the Wycliffite version.

(2) Where the mandative 'past' subjunctive is used in the West-Saxon version, the modal auxiliary (e.g. *should*) is employed as an alternative expression, or the non-finite infinitive clause takes its place in the Wycliffite version.

(3) A comparison of the mandative subjunctive in the West-Saxon version with its counterpart expressions in the Wycliffite version illustrates a general tendency of a transition from finite to non-finite clauses in the history of the English language.

はじめに

英語における接続法の通時的变化を調査する一環として、筆者は新約聖書の「マタイ伝」を資料に時代を遡って調査してきた。浦田 (2005) では『ティンダル訳聖書』(*Tyndale Bible*, 1526) の「マタイ伝」により初期近代英語の最初期である 16 世紀前半の用法を、浦田 (2010) では時代を遡り後期中英語の文献である『ウィクリフ派聖書』(*Wycliffite Bible*, c. 1388) の「マタイ伝」により 14 世紀後半の用法を、浦田 (2018) ではさらに時代を遡り後期古英語の文献である『ウェストサクソン福音書』(*West-Saxon Gospels*, c. 1000) の「マタイ伝」により 11 世紀頃の用法の一端を記述した。今回は、英語史の流れの中では衰退の方向に向かう接続法にあって、例外的に今日まで消長の歴史を経ながら命脈を保つ命令的接続法 (mandative subjunctive) に的を絞り、『ウェストサクソン福音書』の「マタイ伝」を主たる資料として、『ウルガータ聖書』のラテン語訳、および『ウィクリフ派聖書』の後期中英語訳と対比させながら後期古英語の用法の特徴を記述する。

『ウェストサクソン福音書』は、1000 年頃にラテン語訳の『ウルガータ聖書』(*L. Vulgata*; *E. Vulgate*) から古英語に翻訳されたものである。(翻訳元のラテン語テキストについては不明だが、小論でラテン語訳聖書に言及する際には *Biblia Sacra Vulgata* (第 5 版, 2007) を参照する。)

『ウェストサクソン福音書』には 8 つの写本が現存している。小論では、そのうち最も古い写本である MS Corpus Christi College 140 に依拠し、Skeat (1887) の刊本を用いて調査した。また、適宜、Liuzza (1994, 2000) を参照した。

さて、後期古英語の『ウェストサクソン福音書』「マタイ伝」の中で、形態の点から明らかに接続法と判別できる例は、筆者の現在までの調査では「接続法現在形」が 225 例、「接続法過去形」が 33 例見出された。後期中英語の『ウィクリフ派聖書』「マタイ伝」(後期訳) の調査では、「接続法現在形」が 114 例、「接続法過去形」が 6 例であったのに比べると、「接続法現在形」で約 2 倍、「接続法過去形」で約 5 倍に上る。聖書の翻訳という限られた資料であるが、後期古英語と後期中英語における接続法の現れ方の顕著な違いを示している。とりわけ「接続法過去形」の衰退が著しい。

命令的接続法とは、命令・要求・勧告・必要・妥当などを表す動詞・名詞・形容詞のあとの *that* 節に生起する接続法である。『ウェストサクソン福音書』「マタイ伝」では、形態上から明

らかに接続法と判断できる命令的接続法現在の用例は 35 例、命令的接続法過去の用例は 3 例見られた。『ウィクリフ派聖書』『マタイ伝』（後期訳）では、形態上から明らかに接続法と判断できる命令的接続法現在の用例は 36 例見られたが、一方、命令的接続法過去の用例はゼロであった。後期古英語訳と後期中英語訳の間で、命令的接続法現在の用例数はほぼ同様であるのに対して、命令的接続法過去の用例が皆無になったことは命令的接続法の通時的变化を考察するうえで留意すべき点である。

次の節では、まず、『ウェストサクソン福音書』に関して、直説法と接続法の語形を確認しておく。

1. 接続法の語形

後期古英語期の 1000 年頃の『ウェストサクソン福音書』の四福音書における動詞の活用は以下のとおりである。強変化動詞の *niman* (‘take’) と 弱変化動詞の *gelyfan* (‘believe’) を例にして、直説法と接続法の活用を示す。¹⁾

			直説法	接続法	直説法	接続法
現在	単数	1 人称	<i>nime</i>	<i>nime</i>	<i>gelyfe</i>	<i>gelyfe</i>
		2 人称	<i>nimst</i>	<i><u>nime</u></i>	<i>gelyfst</i>	<i><u>gelyfe</u></i>
		3 人称	<i>nimð</i>	<i><u>nime</u></i>	<i>gelyfð</i>	<i><u>gelyfe</u></i>
	複数		<i>nimað</i>	<i><u>nimon</u></i>	<i>gelyfað</i>	<i><u>gelyfon</u></i>
過去	単数	1 人称	<i>nam</i>	<i><u>name</u></i>	<i>gelyfde</i>	<i>gelyfde</i>
		2 人称	<i>name</i>	<i>name</i>	<i>gelyfdest</i>	<i><u>gelyfde</u></i>
		3 人称	<i>nam</i>	<i><u>name</u></i>	<i>gelyfde</i>	<i>gelyfde</i>
	複数		<i>namon</i>	<i>namon</i>	<i>gelyfdon</i>	<i>gelyfdon</i>

形態上で接続法と直説法を判別できるのは、下線で示した箇所である。強変化動詞の *niman* については、現在時制では単数 2・3 人称と複数の場合、過去時制では単数 1・3 人称の場合のみである。弱変化動詞の *gelyfan* については、現在時制では単数 2・3 人称と複数の場合、過去時制では単数 2 人称の場合のみである。現在時制に比べると、過去時制では形態上から接続法／直説法を判別できる場合が少なく、そのことは上で述べた接続法の生起数の違い（接続法現在形：225 例、接続法過去形：33 例）の要因である。通時的に、一般動詞の場合には過去時制における接続法／直説法の形態上の区別が次第に失われ、中英語期の『ウィクリフ派聖書』『マタイ伝』（後期訳）では接続法過去形は 6 例、しかもそのすべてが *Be* 動詞の *were* であった。初期近代英語期の『ティンダル訳聖書』では接続法過去形は 4 例、そのすべてが *Be* 動詞の *were* であった。

小論では、現代英語の文法研究でも興味深い問題点を提供する「命令的接続法」（ただし、現代英語の文法研究では通例「命令的仮定法」と呼ばれる）に焦点を絞り、その歴史の実態の一端を記述するために、後期古英語期の『ウェストサクソン福音書』『マタイ伝』における命令的接続法の用法を検討する。

最初に「命令的接続法現在」を、次いで「命令的接続法過去」を扱う。用例を挙げる際には、『ウェストサクソン福音書』『マタイ伝』の用例とともに、比較のために後期中英語期の『ウィクリフ派聖書』『マタイ伝』(後期訳)、および、両者の翻訳元の『ウルガータ聖書』の当該箇所を並記する。

2. 命令的接続法：現在時制

形態上、明らかに接続法と判断できる命令的接続法現在は 35 例であった。命令的接続法を導く語 (trigger) については、動詞・名詞・形容詞の 3 品詞にわたって例が見られた。トリガーとしての動詞の種類は 14 語、命令的接続法現在の生起数は 24 例；トリガーとしての名詞の種類は 2 語、命令的接続法現在の生起数は 2 例；トリガーとしての形容詞の種類は 4 語、命令的接続法現在の生起数は 9 例であった。

2.1. では、形態的に明らかに接続法と判断できる例を扱う。2.2. では、形態的には接続法か直説法かの判別はできないが(以下、適宜、「接続法／直説法」と略記)、統語的環境から命令的接続法現在と考える例について検討する。

2. 1. 接続法

以下、トリガーごとに、命令的接続法現在が生起する『ウェストサクソン福音書』『マタイ伝』の章節を示す。同一の章節に命令的接続法現在の語形が複数現れた場合は、章節の直後の括弧内に生起数を添えた。以下ではトリガーごとに用例を引用するが、1つのトリガーにつき複数の用例がある場合は、最初に挙げた章節の例を提示することにする。

< 動詞 >

alyfan	(‘permit’)	22:17 27:6
bebeodan	(‘command’)	4:6
begyman	(‘take heed’)	6:1
behawian	(‘take care’)	7:5
biddan	(‘ask, pray’)	24:20 9:38, 26:53
cweþan	(‘say’)	4:3
cyþan	(‘make known, tell’)	28:10
geþafian	(‘allow, suffer’)	23:13
gyrnan	(‘yearn, be eager’)	23:8
halsian	(‘adjure’)	26:63
læran	(‘teach’)	28:20
secgan	(‘say’)	5:34 6:25
warnian	(‘take heed’)	18:10 8:4, 9:30, 24:4, 24:6
willan	(‘will, wish’)	26:17 7:12, 20:33

< 名詞 >

neod	(‘need’)	18:7
willa	(‘will’)	18:14

< 形容詞 >

betera	(‘better’)	18:6 (2) 5:29, 5:30, 18:8
genoh	(‘enough’)	10:25
god	(‘good’)	15:26 (2)
wyrþe	(‘worthy’)	8:8

では、上記の品詞順に、トリガーごとに1例ずつ実際の用例を提示する。以下、文脈と文意を明瞭にするために最初に『新共同訳』（日本語訳聖書）の該当箇所を挙げ、その次に命令的接続法が生起する古英語の文を示す。（なお、『新共同訳』からの引用のうち、古英語の引用部の前後に当たる箇所は括弧に入れる。古英語の文を引用する際には、Skeat (1887) で用いられている省略記号は展開して通常の綴りの ‘and’, ‘þæt’ (‘that’) で示す。）

古英語例の下には、比較のために、『ウィクリフ派聖書』（後期訳）([Wyc] と略記) の該当箇所の中英語例を、3番目に、『ウェストサクソン福音書』と『ウィクリフ派聖書』の翻訳元の『ウルガータ聖書』（ラテン語訳）([Vul] と略記) の該当箇所を挙げる。（例文中、命令的節 (mandative clause) の補文標識の接続詞を囲み線で明示する。命令的節内の接続法の語形はイタリック体で示す。一方、『ウィクリフ派聖書』（後期訳）もしくは『ウルガータ聖書』では不定詞句が用いられている場合には、当該の不定詞を下線で示す。また、『ウィクリフ派聖書』（後期訳）もしくは『ウルガータ聖書』からの引用例中、『ウェストサクソン福音書』の訳文と構造が異なる箇所については、波線で示す。）

各例文のあとには、命令的表現 (mandative expression) の箇所の文法構造として、<接続法節>あるいは<不定詞句>を記した。<異構文>とは、『ウェストサクソン福音書』の表現に比べて、『ウィクリフ派聖書』（後期訳）もしくは『ウルガータ聖書』の表現法が全く異なる別構文の場合である。

古英語の引用例には、できるだけ逐語的な近現代英語訳を添える。ラテン語の引用例には、『ウルガータ聖書』に拠るカトリック系英訳聖書である *Douay-Rheims Version* (1582-1609/10, 使用した版は Challoner の改訂版 (1749-1752) ; [D-R] と略記) の英訳を添える。

2. 1. 1. トリガー：動詞

alyfan (‘permit’)

- (ところで、どうお思いでしょうか、お教えください。) 皇帝に税金を納めるのは、律法に合っているでしょうか、合っていないでしょうか。(22:17)

(1) ys hyt **alyfed** þæt man casere gaful sylle þe na.

(‘is it permitted that one give the emperor tax or not?’) <接続法節>

[Wyc]: Is it **leueful** that tribute be ȝouun to the emperoure, ether nay? <接続法節>

[Vul]: **licet** censum dare Caesari an non

(Cf. [D-R]: ‘is it lawful to give tribute to Caesar, or not?’) <不定詞句>

bebeodan ('command')

- (言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。」「神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」(4:6)

(2) Soplice hit ys awriten þæt he his englum **bebead** be ðe þæt hig þe on hyra handum *beron*. þe læs
þe ðin fot æt stane æt-sporne;
(‘Truly it is written that he commanded his angels concerning thee that they bear thee in their
hands, lest thy foot stumble against a stone.’) <接続法節>

[Wyc]: for it is writun, That to hise aungels he **comaundide** of thee, and thei schulen take thee in
hondis, lest perauenture thou hirte thi foot at a stoon. <異構文 (=Vul)>

[Vul]: scriptum est enim / quia angelis suis **mandabit** de te et in manibus tollent te ne forte offendas
ad lapidem pedem tuum.

(Cf. [D-R]: ‘for it is written: That he hath given his angels charge over thee, and in their hands shall
they bear thee up, lest perhaps thou dash thy foot against a stone.’) <異構文>

*[Vul] mandabit: 現行の『ウルガータ聖書』の語形は未来形 (< mandare ‘command’). 一方, [WS][Wyc] では過
去形。Cf. 古英語期の『リンディスファーン福音書』のラテン語テキストでは完了形(mandauit). ([WS][Wyc] の翻
訳元のラテン語テキストでは完了形 (mandavit) であったのではないかと推測される。なお, [D-R] でも完了形で
訳されている。)

[Vul] et (‘and’) vs. [WS] þæt (‘that’). ラテン語テキストの et (‘and’) を ut (‘that’)と取り違えた可能性については
Liuzza (2000: 87) を参照。²⁾

begyman ('take heed')

- 見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。(さもないと、あなたがたの天の
父のもとで報いをいただけないことになる。)(6:1)

(3) **Begymað** þæt ge ne *don* eowre rihtwisnesse beforan mannum þæt ge sin geherede fram him;
(‘Take heed that ye not do your righteousness before men so that ye be heard by them.’)<接続法節>

[Wyc]: **Takith hede**, þat 3e *do* not 3oure rihtwisnesse bifor men, to be seyn of hem, <接続法節>

[Vul]: **Adtendite** ne iustitiam vestram *faciatis* coram hominibus ut videamini ab eis

(Cf. [D-R]: ‘Take heed that you do not your justice before men, to be seen by them.’) <接続法節>

behawian ('take care')

- 偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の
目からおが屑を取り除くことができる。(7:5)

(4) La þu liccetera ado ærest ut þone beam of þinum agenum eagan. and be-hawa þonne þæt þu ut *ado*
þæt mot of þines broður eagan;
(‘Lo, thou hypocrite, cast out first the beam out of thy own eye, and take heed then that thou cast
the mote out of thy brother’s eye.’) <接続法節>

[Wyc]: Ipocrite, do thou out first the beam of thin ige, and thanne thou schalt se to do out the mote of
the ige of thi brothir. <異構文 (=Vul) >

[Vul]: hypocrita eice primum trabem de oculo tuo / et tunc videbis eicere festucam de oculo fratris tui
(Cf. [D-R]: ‘Thou hypocrite, cast out first the beam out of thy own eye, and then shalt thou see to cast out the mote out of thy brother’s eye.’) <異構文>

*[Vul] videbis: 直説法未来2人称単数形 (< videre ‘see’). [WS] be-hawa: 命令法2人称単数形。

biddan (‘ask, pray’)

- 逃げるのが冬や安息日にならないように、祈りなさい。(24:20)

(5) **biddað** þæt eower fleam on wintra oððe on reste-dæge ne *gewurþe*;
(‘Pray that your flight be not in the winter or on the Sabbath.’) <接続法節>

[Wyc]: **Preye** 3e, that 3oure fleyng *be* not maad in wynter, or in the saboth. <接続法節>

[Vul]: **Orate** autem ut non *fiat* fuga vestra hieme vel sabbato
(Cf. [D-R]: ‘But pray that your flight be not in the winter, or on the sabbath.’) <接続法節>

cweþan (‘say’)

- (すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。)[神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。](4:3)

(6) Gyf þu godes sunu sy **cweð** þæt þas stanas to hlafe *gewurðon*.
(‘If thou be God’s son, say that these stones be made into bread.’) <接続法節>

[Wyc]: If thou art Goddis sone, **seie** that thes stoones *be* maad looues. <接続法節>

[Vul]: si Filius Dei es **dic** ut lapides isti panes *fiant*
(Cf. [D-R]: ‘If thou be the Son of God, command that these stones be made bread.’) <接続法節>

cyþan (‘make known, tell’)

- (イエスは言われた。「恐れることはない。」) 行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。(28:10)

(7) farað and **cyþað** minum gebroþrum þæt hig *faron* on galileam þær hig geseoþ me;
(‘Go and tell my brothers that they go to Galilee, where they shall see me.’) <接続法節>

[Wyc]: go 3e, **telle** 3e to my britheren, that thei go in to Galile; there thei schulen se me. <接続法節>

[Vul]: ite **nuntiate** fratribus meis ut *eant* in Galilaeam ibi me videbunt
(Cf. [D-R]: ‘Go, tell my brethren that they go into Galilee, there they shall see me.’) <接続法節>

geþafian (‘allow, suffer’)

- (律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ。) 自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入らせない。(23:13)

(8) Ne ge in ne gaþ ne ge ne **geþafiað** þæt oðre ingan;
(‘Ye do not go in, neither do ye suffer that others go in.’) <接続法節>

[Wyc]: and 3e entren not, nether **suffren** men entrynge to entre. <不定詞句>

[Vul]: vos enim non intratis nec introeuntes **sinitis** intrare
(Cf. [D-R]: ‘for you yourselves do not enter in; and those that are going in, you suffer not to enter.’)
<不定詞句>

gyrnan (‘yearn, be eager’)

•だが、あなたがたは「先生」と呼ばれてはならない。(あなたがたの師は一人だけで、あとは皆きょうだいなのだ。)(23:8)

(9) Ne **gyrne** ge þæt eow man lareowas *nemne*.
(‘Do not ye yearn that one call you masters.’) <接続法節>

[Wyc]: But nyle ye be clepid maister; <不定詞句>

[Vul]: Vos autem nolite vocari Rabbi (Cf. [D-R]: ‘But be not you called Rabbi.’) <不定詞句>

* ラテン語で2人称複数に対する否定命令表現の <nolite (‘do not’)+ 不定詞句> は古英語では直訳的な <nellen (‘do not’)+ 不定詞句> で表すことが可能であり、古英語の福音書では普通に見られる表現である (nellen は nyllan (ne ‘not’ + willan ‘will, wish’) の接続法現在2人称複数形)。³⁾ しかし、この箇所では *gyrnan* (‘yearn, be eager’) という異なる動詞が用いられ、that 節が後続している。

halsian (‘adjure’)

•(イエスは黙り続けておられた。大祭司は言った。)[「生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか。」(26:63)

(10) Ic **halsige** þe ðurh þone lyfiendan god. þæt ðu *secge* us gyf þu sy crist godes sunu;
(‘I adjure thee through the living God that thou say to us if thou be Christ, God’s son.’) <接続法節>

[Wyc]: Y **coniure** thee bi lyuynge God, that thou *seie* to vs, if thou art Crist, the sone of God. <接続法節>

[Vul]: **adiuro** te per Deum vivum / ut *dicas* nobis si tu es Christus Filius Dei
(Cf. [D-R]: ‘I adjure thee by the living God, that thou tell us if thou be the Christ the Son of God.’)
<接続法節>

læran (‘teach’)

•あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。(わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。)(28:20)

(11) and **lærað** þæt hig *healdon* ealle þa ðing þe ic eow bebead.
(‘and teach that they hold all the things that I have commanded you’) <接続法節>

[Wyc]: **techynge** hem to kepe alle thingis, what euer thingis Y haue comaundid to 3ou; <不定詞句>

[Vul]: **docentes** eos servare omnia quaecumque mandavi vobis
(Cf. [D-R]: ‘Teaching them to observe all things whatsoever I have commanded you’) <不定詞句>

secgan ('say')

- しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。(そこは神の玉座である。)(5:34)

(12) Ic **secge** eow soþlice **[þæt]** ge eallunga ne *swerion*. ne þurh heofon.

('I say to you truly that ye not swear at all, neither through heaven.') <接続法節>

[Wyc]: But Y **seie** to 3ou, **[that]** 3e *swere* not for any thing; nethir bi heuene, <接続法節>

[Vul]: ego autem **dico** vobis non *iurare* omnino / neque per caelum

(Cf. [D-R]: 'But I say to you not to swear at all, neither by heaven,') <不定詞句>

warnian ('take heed')

- これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。(言うておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。)(18:10)

(13) **Warniað** **[þæt]** ge ne *oferhogian* ænne of þysum lytlingum þe gelyfað on me;

('Take heed that ye not despise one of these little ones who believe in me.') <接続法節>

[Wyc]: **Se** 3e, **[that]** 3e *dispise* not oon of these litle. <接続法節>

[Vul]: **Videte** ne *contemnatis* unum ex his pusillis

(Cf. [D-R]: 'See that you despise not one of these little ones:') <接続法節>

willan ('will, wish')

- (除酵祭の第一日に、弟子たちがイエスのところに来て、)「どこに、過越の食事をなさる用意をいたしましょうか」(と言った)。(26:17)

(14) Hwær **wylt** ðu **[þæt]** we *ge-gearwion* þe þine ðenunga to eastron;

('Where wilt thou that we prepare for thee thy service of food for the Passover?') <接続法節>

[Wyc]: Where **wolt** thou we *make* redi to thee, to ete paske? <接続法節>

[Vul]: ubi **vis** *paremus* tibi comedere Pascha

(Cf. [D-R]: 'Where wilt thou that we prepare for thee to eat the pasch?') <接続法節>

2. 1. 2. トリガー：名詞

neod ('need')

- (世は人をつまづかせるから不幸だ。) つまづきは避けられない。(だが、つまづきをもたらす者は不幸である。)(18:7)

(15) **Neod** ys **[þæt]** swyc-domas *cumon*. ('It is necessary that scandals come') <接続法節>

[Wyc]: for it is **nede** **[that]** *sclaundris come*; <接続法節>

[Vul]: **necesse** est enim **[ut]** *veniant* scandala

(Cf. [D-R]: 'For it must needs be that scandals come:') <接続法節>

willa ('will')

- そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。(18:14)

(16) Swa nys **willa** beforan eowrum fæder. þe on heofenum ys. **[pæt]**an *forwurpe* of þisum lytlingum;
(‘So it is not the will before your Father, who is in heaven, that one of these little ones perish’)
<接続法節>

[Wyc]: So it is not the **wille** bifor 3oure fadir that is in heuenes, **[that]**oon of these litle *perische*.
<接続法節>

[Vul]: sic non est **voluntas** ante Patrem vestrum qui in caelis est **[ut]***pereat* unus de pusillis istis
(Cf. [D-R]: ‘Even so it is not the will of your Father, who is in heaven, that one of these little ones should perish.’) <接続法節>

2. 1. 3. トリガー：形容詞

betera ('better')

- しかし、わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである。(18:6)

(17) Soþlice seþe beswicð ænne of ðyssum lytlingum. þe on me gelyfað. **betera** him ys **[pæt]**an cwyrnstan *si* to hys swyran gecnytt. and *si* besenced on sæs grund;
(‘Truly he who deceiveth one of these little ones who believe in me, it is better that a millstone be tied to his neck and be drowned in the bottom of the sea.’) <接続法節>

[Wyc]: But who so sclaunderith oon of these smale, that bileuen in me, it **spedith** to hym **[that]** a mylnstoon of assis *be* hangid in his necke, and he *be* drenchid in the depnesse of the see. <接続法節>

[Vul]: Qui autem scandalizaverit unum de pusillis istis qui in me credunt / **expedit** ei **[ut]***suspendatur* mola asinaria in collo eius / et *demergatur* in profundum maris
(Cf. [D-R]: ‘But he that shall scandalize one of these little ones that believe in me, it were better for him that a millstone should be hanged about his neck, and that he should be drowned in the depth of the sea.’) <接続法節>

genoh ('enough')

- 弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。(家の主人がベルゼブルと言われるのなら、その家族の者はなおさら悪く言われることだろう。)(10:25)

(18) **genoh** byþ soþlice þam leorning-cnihte **[pæt]**he sy swylce hys lareow and þeow swylce hys hlafurd;
(‘It is enough indeed for the disciple that he be as his master, and the servant as his lord.’) <接続法節>

[Wyc]: it is **ynow3** to the disciple, **[that]**he *be* as his maistir, and to the seruaunt as his lord. <接続法節>

[Vul]: **sufficit** discipulo **[ut]** *sit* sicut magister eius / et servus sicut dominus eius
(Cf.[D-R]:‘It is enough for the disciple that he be as his master, and the servant as his lord.’)<接続法節>

god ('good')

- イエスが、「子どもたちのパンを取って小犬にやってはいけない」とお答えになると, (15:26)

(19) Ða cw[æð] he nys hit na **god** [pæt] man *nime* bearna hlaf and hundum *worpe*.

('Then said he, it is not good that one take children's bread and cast (it) to dogs.') <接続法節>

[Wyc]: Which answeride, and seide, It is not **good to take** the breed of children, and **caste** to houndis.

<不定詞句>

[Vul]: qui respondens ait / non est **bonum** sumere panem filiorum et mittere canibus

(Cf. [D-R]: 'Who answering, said: It is not good to take the bread of the children, and to cast it to the dogs.') <不定詞句>

wyrþe ('worthy')

- (すると、百人隊長は答えた。)'主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。(ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。)'

(8:8)

(20) Drihten ne eom ic **wyrðe** [pæt] þu *ingange* under mine þecene.

('Lord, I am not worthy that thou go in under my roof.') <接続法節>

[Wyc]: Lord, Y am not **worthi**, [that] thou *entre* vndur my roof; <接続法節>

[Vul]: Domine non sum **dignus** [ut] *intres* sub tectum meum

(Cf. [D-R]: 'Lord, I am not worthy that thou shouldst enter under my roof.') <接続法節>

以上, 2.1.1. から 2.1.3. で、『ウェストサクソン福音書』「マタイ伝」に生起する命令的接続法現在の例を引用した。ここでは代表例として各トリガーについて1例ずつ, 計20例を挙げたが, 残りの15例については巻末の「補遺」に記載することにする。

翻訳元の『ウルガータ聖書』で<接続法節>, 古英語訳の『ウェストサクソン福音書』と中英語訳の『ウィクリフ派聖書』においても同じく<接続法節>である場合は, 上掲の例のうち半数強を占める。(例文: (3) (5) (6) (7) (10) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (20))

一方では, 翻訳元のラテン語では<不定詞句>, 古英語訳では<接続法節>, 中英語訳では<不定詞句>という場合もある。これらは, 古英語テキストでトリガーが (8) *geþafian* ('allow, suffer'), (11) *læran* ('teach'), (19) *god* ('good') の例であった。(9) *gyrnan* ('yearn, be eager') については, 別途, 上で注記した)。英語史の流れの中では, かつては定形節で表現されたものが次第に非定形句による表現に移行する一傾向があったため(例: *that* 節 → 不定詞句), その一環としてとらえることができる。⁴⁾

なお, (1) *alyfan* ('permit'), (12) *secgan* ('say') のように, ラテン語では<不定詞句>, 古英語訳と中英語訳ではともに<接続法節>という場合もある。一般にラテン語では不定法構文が多用されるが, 古英語では十分には発達しておらず, *that* 節を用いることが多い。(1) (12) に関して言えば, 中英語訳においても *that* 節が用いられている。

<異構文>の例は(2)(4)である。いずれにおいても、『ウィクリフ派聖書』(後期訳)は『ウルガー
タ聖書』の構文に準拠した訳であるが、『ウェストサクソン福音書』の訳は構造が異なる。古英語
の訳者の誤訳か、あるいは、翻訳の典拠となった『ウルガータ聖書』の版において該当箇所を読み
が異なっていた可能性がある。⁵⁾

2.2. 接続法／直説法

ところで、形態的には接続法／直説法の区別がつかないが、統語的環境から命令的接続法とみ
なしうる語形が計4例見られた。それらの節を導く語(トリガー)と、節内で当該の語形が生起す
る章節を下に示す。

<動詞>

þafian ('allow, suffer')	7:4 (<i>ado</i>)
willan ('will, wish')	20:32 (<i>ido</i>), 27:17 (<i>agyfe</i>), 27:21 (<i>forgyfe</i>)

『ウルガータ聖書』で上記4例に対応する箇所のラテン語は、形態のみからは接続法(現在)
／直説法(未来)の区別がつかないものが3例、不定詞句を用いたものが1例であった。前者(7:4,
20:32, 27:17)のラテン語については、統語的環境から接続法と考えられる。後者(27:21)のラ
テン語では不定詞付き対格が用いられていた。

では、その4か所について、古英語訳、中英語訳、『ウルガータ聖書』のラテン語文を挙げ
ておく。(命令的節(**mandative clause**)内の<接続法／直説法>の語形は点線で示す。法助動
詞は二重下線で示す。)

þafian ('allow, suffer')

- (兄弟に向かって、)「あなたの目からおが屑を取らせてください」(と、どうして言えようか。自分
の目に丸太があるではないか。)(7:4)

(21) broþur **þafa** þæt ic ut aðo þæt mot of þinum eagan

('Brother, suffer that I cast out the mote out of thy eye.') <接続法／直説法節>

[Wyc]: Brothir, suffre I schal do out a mote fro thin ize, <法助動詞節>

[Vul]: **sine** ejciam festucam de oculo tuo

(Cf. [D-R]: 'Let me cast the mote out of thy eye;') <接続法／直説法節>

willan ('will, wish')

- (イエスは立ち止まり、二人を呼んで、)「何をしてほしいのか」(と言われた。)(20:32)

(22) Hwæt **wylle** gyt þæt ic inc do; ('What will ye both that I do to you both?') <接続法／直説法節>

[Wyc]: What **wolen** 3e, that Y do to you? <接続法／直説法節>

[Vul]: quid **vultis** ut faciam vobis (Cf. [D-R]: 'What will ye that I do to you?') <接続法／直説法節>

- (ピラトは、人々が集まって来たときに言った。)
「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。
それともメシアといわれるイエスか。」 (27:17)

(23) Hwæþer **wylle** ge þæt ic eow agvfe þe barrabban ðe þone hælynd. ðe is crist gehaten;
(‘Which of the two will ye that I give up to you, Barabbas, or the Saviour who is called Christ?’)
<接続法／直説法節>

[Wyc]: Whom **wolen** ye, that Y delyuere to 3ou? whether Barabas, or Jhesu, that is seid Crist?
<接続法／直説法節>

[Vul]: quem **vultis** dimittam vobis / Barabban an Iesum qui dicitur Christus
(Cf. [D-R]: ‘Whom will you that I release to you, Barabbas, or Jesus that is called Christ?’)
<接続法／直説法節>

- (そこで、総督が、)「二人のうち、どちらを釈放してほしいのか」(と言うと、人々は、「バラバを」
と言った。) (27:21)

(24) Hwæþerne **wylle** ge þæt ic forgvfe eow of þisum twam;
(‘Which will ye that I give up to you out of these two?’) <接続法／直説法節>

[Wyc]: Whom of the tweyn **wolen** 3e, that *be* delyuerit to 3ou? <接続法節>

[Vul]: quem **vultis** vobis de duobus dimitti
(Cf. [D-R]: ‘Whether will you of the two to be released unto you?’) <不定詞句>

3. 命令的接続法：過去時制

形態上、明らかに接続法と判断できる命令的接続法過去は3例であった。

3.1. では明らかに接続法と判断できる例について扱う。3.2. では形態的には接続法／直説法の区別がつかないが、統語的環境から命令的接続法とみなしうる例を扱う。⁶⁾

3. 1. 接続法

命令的接続法過去を導くトリガーとしては, *bebeodan* (‘command’), *geþafian* (‘allow, suffer’), *nydan* (‘compel’) の3動詞が1例ずつ見られた。全3例を挙げる。

bebeodan (‘command’)

- そこで、イエスは地面に座るように群衆に命じ、 (15:35)

(25) And he **bebead** þa þæt seo menegu *sæte* ofer þære eorþan
(‘And he then commanded that the crowd should sit on the earth.’) <接続法節>

[Wyc]: And he **comaundide** to the puple, to sitte to mete on the erthe. <不定詞句>

[Vul]: et **praecepit** turbæ ut *discumberent* super terram
(Cf. [D-R]: ‘And he commanded the multitude to sit down on the ground.’) <接続法節>

geþafian (‘allow, suffer’)

- (このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、) 目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。(24:43)

(26) witodlice he wolde wacigean and nolde **geþafigen** **þæt** man hys hus *under-dulfe*;
(‘certainly he would watch and would not suffer that someone should dig under his house.’) <接続法節>

[Wyc]: certis he wolde wake, and **suffre** not his hous to be vndurmyned. <不定詞句>

[Vul]: vigilaret utique et non **sineret** perfodiri domum suam
(Cf. [D-R]: ‘he would certainly watch, and would not suffer his house to be broken open.’) <不定詞句>

nydan (‘compel’)

- (兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、) イエスの十字架を無理に担がせた。(27:32)

(27) þone hig **nyddon** **þæt** he *bære* hys rode; (‘him they compelled to bear his rood.’) <接続法節>

[Wyc]: thei **constreyneden** hym to take his cross. <不定詞句>

[Vul]: hunc **angariaverunt** **ut** *tolleret* crucem eius
(Cf. [D-R]: ‘him they forced to take up his cross.’) <接続法節>

上記の 3 例において、古英語訳では 3 例とも接続法節、中英語訳では 3 例とも不定詞句が用いられているのが対称的である。現象として、中英語期に不定詞付き対格などの不定詞句が増加していく傾向の一端がうかがえる。

3. 2. 接続法／直説法

形態的には接続法／直説法の区別がつかないが、統語的環境から命令的接続法と見なしうる語形は計 12 例収集できた。それらの節を導くトリガーの動詞および名詞と、当該の語形が生起する章節を下に示す。(以下ではトリガーごとに用例を引用するが、1つのトリガーにつき複数の用例がある場合は、最初に挙げた章節の例を提示することにする。)

<動詞>

(be)beodan (‘command’)	12:16 (<i>sædon</i>) 16:20 (<i>sædon</i>), 20:31(<i>suwodon</i>)
biddan (‘ask, pray’)	16:1 (<i>ætywde</i>) 8:34 (<i>ferde</i>), 14:36 (<i>æthrinon</i>)
gebyrian (‘befit’)	23:23 (<i>dydon, forletun</i>)
læran (‘teach’)	27:20 (<i>bædon, fordydon</i>)

<名詞>

andswaru (‘answer’)	2:12 (<i>hwyrfdon</i>)
gecwyræden (‘agreement’)	20:2 (<i>sealde</i>)

『ウルガータ聖書』において上記 12 例に対応する箇所では、ほぼ接続法未完了過去形が用いられている。(不定詞を用いたものが 1 例 (23:23), 残る 1 例 (20:2) は全く異なる構造により前置詞句で表されている。)

上記左列のそれぞれの動詞もしくは名詞について、古英語文を 1 例ずつ挙げる。(残りの 4 例については巻末の「補遺」に記載する。)

<動詞>

bebeodan ('command')

- 御自分のことを言いふらさないようにと戒められた。(12:16)

(28) and **be-bead** him þæt hig hyt nanum men ne sædon.

('and [Jesus] commanded them that they should not tell it to any man.') <接続法／直説法節>

[Wyc]: And he **comaundide** to hem, þat thei schulden not make hym knowun; <法助動詞節>

[Vul]: et **praecepit** eis ne manifestum eum *facerent*

(Cf. [D-R]: 'And he charged them that they should not make him known.') <接続法節>

biddan ('ask, pray')

- (ファリサイ派とサドカイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、) 天からのしるしを見せてほしいと願った。(16:1)

(29) and **bædon** þæt he him sum tacen of heofone æt-yrde.

('and [the Pharisees and the Sadducees] asked that he should show them a sign from heaven.') <接続法／直説法節>

[Wyc]: and **preieden** hym to schewe hem a tokene fro heuene. <不定詞句>

[Vul]: et **rogaverunt** eum ut signum de caelo *ostenderet* eis.

(Cf. [D-R]: 'and they asked him to shew them a sign from heaven.') <接続法節>

gebyrian ('befit')

- (律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。薄荷、いのんど、茴香の十分の一は献げるが、律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実はないがしろにしているからだ。) これこそ行うべきことである。もとより、十分の一の献げ物もないがしろにしてはならないか。(23:23)

(30) þas þing hyt **gebyrede** þæt ge dydon and þa oðre ne forletun.

('it befitted that ye should do these things and should not neglect the others.') <接続法／直説法節>

[Wyc]: And it bihofte to do these thingis, and not to leeue tho. <不定詞句>

[Vul]: haec oportuit *facere* et illa non *omittere*

(Cf. [D-R]: 'These things you ought to have done, and not to leave those undone.') <不定詞句>

læran ('teach, persuade')

- しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようにと群衆を説得した。(27:20)

(31) Ða **lærdon** þæra sacerda ealdras and þa hlafordas þæt folc þæt hig hæddon barrabban and þone hællyn [*sic*] fōrddon;
(‘Then the chiefs of the priests and the lords [*i.e.* elders] persuaded the people that they should ask for Barabbas and destroy the Saviour.) <接続法／直説法節>

[Wyc]: Forsothe the prince of prestis, and the eldere men **counseiliden** the puple, that thei schulden axe Barabas, but thei schulden distrye Jhesu. <法助動詞節>

[Vul]: Principes autem sacerdotum et seniores **persuaserunt** populis ut *peterent* Barabban / Iesum vero *perderent*
(Cf. [D-R]: ‘But the chief priests and ancients persuaded the people, that they should ask Barabbas, and make Jesus away.’) <接続法節>

<名詞>

andswaru ('answer')

- ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、(別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。) (2:12)

(32) And hi afengon **andsware** on swefnum. þæt hi eft to herode ne hwyrfdon.
(‘And they received an answer in a dream that they should not turn back to Herod.’)
<接続法／直説法節>

[Wyc]: And whanne thei hadden take an **answere** in sleep, that thei schulden not turne azen to Eroude,
<法助動詞節>

[Vul]: et **responso** accepto in somnis ne *redirent* ad Herodem,
(Cf. [D-R]: ‘And having received an answer in sleep that they should not return to Herod.’)
<接続法節>

gecwyræden ('agreement')

- 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。(20:2)

(33) Gewordenre **gecwyrædene** þam wyrhtum he sealde ælcon ænne penig wiþ hys dæges worce. he asende hig on hys win-geard;
(‘Agreement (having been) made with the workers (that) he should give each one a penny for his day’s work, he sent them into his vineyard.’) <接続法／直説法節>

[Wyc]: And whanne the couenaunt was maad with werk men, of a peny for the dai, he sente hem in to his vyneȝerd. <異構文 (=Vul)>

[Vul]: conventionem autem facta cum operariis ex denario diurno / misit eos in vineam suam
(Cf. [D-R]: ‘And having agreed with the labourers for a penny a day, he sent them into his vineyard.’) <異構文>

古英語訳では＜接続法／直説法節＞で表されるのに対して、中英語訳では主には＜不定詞句＞あるいは＜法助動詞＞で表されている。中英語期における不定詞補文の増加の傾向については既に 2.1.3. や 3.1. で言及したとおりであるが、他方、中英語では接続法過去は *Be* 動詞の接続法過去形の *were* 以外には形態上での区別が不可能になっていたため、上掲の例文 (28) (31) (32) のように法助動詞 (*should* など) を命令的節内で用いることが一般化していった。

命令的接続法過去の変遷について振り返ると、古英語では主に接続法過去で表されていた過去の命令的接続法は、接続法過去形の形態上の区別が失われていくに従って、次第に法助動詞の過去形 (*should* など) を用いて表されるようになり、さらには接続法現在で表すことも可能となっていった。過去の文脈でかつては接続法過去で表したものを現代では接続法現在で表す、つまり、過去時に言及する命令的接続法に関しては接続法の時制が過去から現在に変化したと考えることができる。⁷⁾

おわりに

以上、小論では、『ウェストサクソン福音書』の「マタイ伝」を主たる資料として、翻訳元の『ウルガータ聖書』のラテン語テキスト、および、『ウィクリフ派聖書』(後期訳)の後期中英語テキストの該当箇所と対照しつつ、後期古英語における命令的接続法の用法の実態の一端を提示した。その際には、形態上からは接続法か直説法かの判別は不能であるが、統語的環境から命令的接続法と見なしうる例(＜接続法／直説法＞)も調査の対象とし、収集できたすべての例を命令的接続法とともに本文中ないし補遺に収録した。

後期古英語の『ウェストサクソン福音書』「マタイ伝」では、形態的に明らかな＜命令的接続法現在＞の語形は 35 例、統語的環境から接続法と見なしうる＜命令的接続法／直説法現在＞の語形は 4 例、合わせて 39 例であった。また、過去時制の場合、形態的に明らかな＜命令的接続法過去＞の語形は 3 例、統語的環境から接続法と見なしうる＜命令的接続法／直説法過去＞の語形は 12 例、合わせて 15 例であった。

後期中英語の『ウィクリフ派聖書』「マタイ伝」では、形態的に明らかな＜命令的接続法現在＞の語形は 36 例あり、用例総数の点では『ウェストサクソン福音書』の場合とほぼ同等である。小論で調査した限り、現在時制の場合には後期中英語においても命令的接続法の用法は健在であった。しかし、過去時制の場合にはそもそも接続法過去の語形の衰退が顕著であり(*Be* 動詞の *were* に限られる)、形態的に明らかな＜命令的接続法過去＞の例は皆無になり、統語的環境から接続法と見なしうる＜命令的接続法／直説法過去＞の例も全く観察されなかった。そこで、代替表現として、命令的節 (mandative clause) 内で法助動詞が用いられたり(例: *should*)、あるいは、非定形 (non-finite) の不定詞句によって表現されたりしている。

小論においては、『ウェストサクソン福音書』における命令的接続法の用例を『ウィクリフ派聖書』(後期訳)の該当箇所と対比することにより、定形 (finite) から非定形 (non-finite) へという英語の文構造の通時的変化の一傾向を若干ながらも実例により観察することができた。

注

- 1) Liuzza (2000) の巻末グロッサリーに記された語形を参考にした。一部、『ウェストサクソン福音書』には実際に生じなかった項もあるが、それらについては同種の語の活用の仕方からの類推で補った。直説法／接続法の形態上の判別の留意点については Mitchell (1978: §§ 112, 118), Mitchell (1985: §§ 601, 601a) などを参照。古英語期全般の動詞活用形の概要については Hogg (1992: 146-164) を参照。小論で扱う後期古英語より前の時代の 900 年頃の初期古英語の接続法の形態については久保内 (1971: 253-262) に詳細な分析がある。『ウェストサクソン福音書』の接続法の用法全般に関する記述的研究としては古典的著作の Henshaw (1894) があり、現在でも参考になる。
- 2) [Vul] et ... tollent: 等位接続詞の et ('and') に直説法未来形の tollent (< tollere 'bear') が後続。一方, [WS] þæt hig ... beron: 従属接続詞の þæt ('that') に接続法現在形の beron (< beran 'bear') が後続。Cf. Liuzza (2000: 83): The translation apparently misreads *et as ut* (cf. Mt 26:53, Mk 9:30, Lk 2:3, 3:20, 9:28, Jn 4:10, 10:17, 12:5, 12:46, 17:23, 19:33), a harmonization with the parallel Lk 4:10-11 *ut conseruent te et qua in manibus tollent te* = 'þæt hig þe gehealdon. and þæt hig þe mid handum nimon'. Ælfric, *CHom* I.ii, has the same reading: 'þæt hi þe on hyra handum ahebben'."
- 3) <nellen ('do not') + 不定詞句> の例 (「マタイ伝」6:19): *Nellen ge gold-hordian* eow gold-hordas on eorþan. ('Do not store up for yourselves treasures on earth.') Cf. [Vul]: *nolite thesaurizare* vobis thesauros in terra ('Do not store up for yourselves treasures on earth.')
- 4) Cf. Los (2015: 149-150), Fischer et al. (2017: 110, 169), etc.
- 5) 『ウェストサクソン福音書』に関して、ラテン語の版の読みの違いについては Liuzza (2000: 27-28) の見解を参照。"A third reservation arises from the ubiquity of some variant readings; approximately 130 of the substantial differences between the OE version and the modern Vulgate are too common to be distinctive. They reflect readings which appear in all branches of the Latin MS traditions but not in the modern printed text...."
- 6) 本節 (第3節) における命令的接続法過去に関する記述は、浦田 (2018: 314-317) の調査結果に基づき、後期古英語から後期中英語へという通時的視点から敷衍したものである。
- 7) (この箇所については浦田 (2018: 326) を参照。浦田 (2018: 注12) を補筆のうえ、以下に再録する。) 古英語の命令的接続法過去の変遷を例示するために、「ルカ伝」の23:23により、古英語訳 (『ウェストサクソン福音書』), 中英語訳 (『ウィクリフ派聖書』(後期訳)), 初期近代英語訳 (『欽定訳聖書』), そして、現代英語訳の例として *New Revised Standard Version* (NRSV) と *New American Standard Bible* (NASB) から引用する。
・ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。(その声はますます強くなった。)(『新共同訳』「ルカ伝」23:23)
[古英]: And hig astodon and mycelre stefne **bædon** þæt he *wære* ahangen;
(they stood up and asked with a loud voice that he should be hanged.)
[中英]: And thei contynueden with greet voicis **axyng**e, that he **schulde** be crucified;
[初近]: And they were instant with loud voyces, **requiring** that he **might** be crucified:
[現代]:
・NRSV: But they kept urgently **demanding** with loud shouts that he **should** be crucified;
・NASB: But they were insistent, with loud voices **asking** that He *be* crucified.
上記の命令的構文に関して、古英語訳では接続法過去形 (*wære*), 中英語訳と初期近代英語訳では法助動詞の過去形 (*should, might*), 現代英語訳では法助動詞の過去形 (*should*) に加えて接続法現在形 (*be*) が用いられている。

参考文献

・一次資料 ＊参照した聖書の版等

<古英語訳>

The Gospel according to Saint Matthew in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions, Synoptically Arranged with Collations Exhibiting All the Readings of All the MSS. Edited by Walter W. Skeat. Cambridge: Cambridge University Press, 1887.

<中英語訳>

The Holy Bible: containing the Old and New Testaments, with the Apocryphal Books, in the Earliest English Versions Made from the Latin Vulgate by John Wycliffe and his Followers. Edited by Josiah Forshall and Frederic Madden. Oxford: Oxford University Press, 1850.

<初期近代英語訳>

The Holy Bible: Douay-Rheims Version. Revised by Richard Challoner. 1749-52. ([Reprint] Rockford, Illinois: Tan Books and Publishers, 1989.)

The Holy Bible: an Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version Published in the Year 1611 with an Introduction by Alfred W. Pollard. Oxford: Oxford University Press / Tokyo: Kenkyusha, 1985.

<ラテン語訳>

Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem. 5th edition by Robert Weber and Roger Gryson. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2007.

<日本語訳>

『聖書 新共同訳』 共同訳聖書実行委員会 日本聖書協会 1987.

・二次資料

Fischer, Olga, Hendrick De Smet, and Wim van der Wurff. 2017. *A Brief History of English Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.

Henshaw, Alonzo Norton. 1894. *The Syntax of the Indicative and Subjunctive Moods in the Anglo-Saxon Gospels*. Leipzig-R., Printed by O. Schmidt.

Hogg, Richard M. 1992. "Phonology and Morphology" in *The Cambridge History of the English Language*. Vol. I: *The Beginnings to 1066*, ed. by Richard M. Hogg. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 67-167.

Liuzza, Roy Michael. 1994. *The Old English Version of the Gospels*. Vol. I: Text and Introduction. EETS. O.S. 304.
_____. 2000. *The Old English Version of the Gospels*. Vol. II: Notes and Glossary. EETS. O.S. 314.

Los, Battelou. 2015. *A Historical Syntax of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Mitchell, Bruce. 1978. *A Guide to Old English*. Oxford: Basil Blackwell.

_____. 1985. *Old English Syntax*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press.

久保内端郎 1971 「初期古英語の仮定法—その形態と用法」『一橋大学研究年報 人文科学研究』13号: pp. 243-279.

浦田和幸 2005 「初期近代英語における接続法—Tyndale 訳聖書をめぐって」『言語情報学研究報告』(東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」) No. 7: pp. 467-482.

- _____ 2010 「後期中英語における接続法の用法について—『ウィクリフ派聖書』「マタイ福音書」を資料に—」『東京外国語大学論集』 81号: pp. 447-465.
- _____ 2018 「後期古英語における接続法の用法: 接続法過去の場合 —『ウェストサクソン福音書』「マタイ伝」を資料に—」『東京外国語大学論集』 97号: pp. 305-329.
- _____ 2020 「後期古英語における願望・命令表現の一考察 —『ウェストサクソン福音書』の《山上の垂訓》を資料に—」『語学研究所論集』(東京外国語大学) 24号: pp. 17-35.

補遺

- A. 命令的接続法現在 (本文中の 2.1.1-3. で割愛した例)
- B. 命令的接続法／直説法過去 (本文中の 3.2. で割愛した例)

略語

[Vul] = *Vulgate*. [WS] = *West-Saxon Gospels*. [Wyc] = *Wycliffite Bible*.

- A. 命令的接続法現在 (本文中の 2.1.1-3. で割愛した例)

<動詞>

alyfan ('permit')	27:6
biddan ('ask, pray')	9:38, 26:53
secgan ('say')	6:25
warnian ('take heed')	8:4, 9:30, 24:4, 24:6
willan ('will, wish')	7:12, 20:33

<形容詞>

betera ('better')	5:29, 5:30, 18:8
--------------------------	------------------

<動詞>

alyfan ('permit')

- (祭司長たちは銀貨を拾い上げて,) 「これは血の代金だから, 神殿の収入にするわけにはいかない」 (と言い,) (27:6)

[WS]: Nys hyt na **alyfed** þæt we *asendon* hyt on ure maðmcyste. forþam hyt is bloddes wurð;
(‘It is not permitted that we send it forth to our treasure-chest, because it is the price of blood.’)
<接続法節>

[Wyc]: It is not **leueful** to putte it in to the treserie, for it is the prijs of blood. <不定詞句>

[Vul]: non **licet** mittere eos in corbanan quia pretium sanguinis est
(Cf. [D-R]: ‘It is not lawful to put them into the corbona, because it is the price of blood.’)
<不定詞句>

biddan ('ask, pray')

- だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主になさい。」(9:38)

[WS]: biddaþ ðæs ripes hlaforð þæt he *sende* wyrhtan to his ripe;
(‘pray the lord of the harvest that he send workmen to his harvest.’) <接続法節>

[Wyc]: Therfor **preye** 3e the lord of the ripe corn, that he *sende* werke men in to his ripe corn.<接続法節>

[Vul]: rogate ergo dominum messis ut *eiciat* operarios in messem suam
(Cf. [D-R]: ‘Pray ye therefore the Lord of the harvest, that he send forth labourers into his harvest.’)
<接続法節>

biddan ('ask, pray')

- わたしが父にお願いできないとも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。(26:53)

[WS]: Wenst þu þæt ic ne myhte **biddan** minne fæder. þæt he *sende* me nu ma þonne twelf eorydu engla;
(‘Thinkest thou that I could not ask my Father that he send me immediately more than twelve legions of angels?’) <接続法節>

[Wyc]: Whether gessist thou, that Y may not **preie** my fadir, and he schal 3yue to me now mo than twelue legiouns of aungels? <異構文 (=Vul)>

[Vul]: an putas quia non possum **rogare** Patrem meum / et exhibebit mihi modo plus quam duodecim legiones angelorum
(Cf. [D-R]: ‘Thinkest thou that I cannot ask my Father, and he will give me presently more than twelve legions of angels?’) <異構文>

* [Vul] et exhibebit ('and he will give'): 等位接続詞の et ('and') に直説法未来形の exhibebit
(< exhibere 'hold forth, present') が後続。一方, [WS] þæt he sende ('that he send'): 従属接続詞 þæt ('that') に接続法現在形の sende (< sendan 'send') が後続。Cf. Liuzza (2000: 87): “the translation may simply have confused *et* and *ut*, as is common elsewhere (cf. Mt. 4:6).”

secgan ('say')

- だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。(命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。)(6:25)

[WS]: forþam ic **secge** eow þæt ge ne *sin* ymbhydige eowre sawle hwæt ge eton. ne eowrum lic-haman mid hwam ge syn ymbcrysde;
(‘Therefore I say to you that ye be not anxious about your soul, what ye eat, nor about your body, with what ye be clothed.’) <接続法節>

[Wyc]: Therfor I **seie** to 3ou, that 3e *be* not bisi to 3oure lijf, what 3e schulen ete; nether to 3oure bodi, with what 3e schulen be clothid. <接続法節>

[Vul]: Ideo **dico** vobis / ne solliciti *sitis* animae vestrae quid manducetis / neque corpori vestro quid induamini
(Cf. [D-R]: ‘Therefore I say to you, be not solicitous for your life, what you shall eat, nor for your body, what you shall put on.’) <接続法節>

warnian ('take heed')

- (イエスはその人に言われた。)
「だれにも話さないように気をつけなさい。(ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めた供え物を献げて、人々に証明しなさい。)」(8:4)

[WS]: **warna** þe **þæt** þu hyt nænegum men ne *secge*;
(‘Take heed that thou tell it to no man.’) <接続法節>

[Wyc]: Se, seie thou to no man; <異構文>

[Vul]: vide nemini dixeris (Cf. [D-R]: ‘See thou tell no man.’) <異構文>

warnian ('take heed')

- (二人は目が見えるようになった。)
イエスは、「このことは、だれにも知らせてはいけない」と彼らに厳しくお命じになった。(9:30)

[WS]: And se hælend behead him cw[e]þende **warniað** **þæt** ge hyt nanum men ne *secgeon*;
(‘The Saviour commanded them saying, Take heed that ye tell it to no man’) <接続法節>

[Wyc]: And Jhesus thretenede hem, and seide, **Se** 3e, **that** no man *wite*. <接続法節>

[Vul]: et comminatus est illis Iesus dicens / **videte** **ne** quis *sciat*
(Cf. [D-R]: ‘and Jesus strictly charged them, saying, See that no man know this.’) <接続法節>

warnian ('take heed')

- イエスはお答えになった。「人に惑わされないように気をつけなさい。」(24:4)

[WS]: Ða andswarode he him and cwæð. **warniað** **þæt** eow nan ne *beswice*;
(‘Then answered he him and said, Take heed that no one deceive you.’) <接続法節>

[Wyc]: And Jhesus answeride, and seide to hem, **Loke** ye, **that** no man *disseyue* 3ou. <接続法節>

[Vul]: et respondens Iesus dixit eis / **videte** **ne** quis vos *seducat*
(Cf. [D-R]: ‘And Jesus answering, said to them: Take heed that no man seduce you.’) <接続法節>

warnian ('take heed')

- (戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞くだろうが、) 慌てないように気をつけなさい。(そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。)(24:6)

[WS]: **warnigeað** **þæt** ge ne *beon* gedrefede; (‘Take heed that ye be not troubled.’) <接続法節>

[Wyc]: **se** 3e **that** 3e be not disturblid; <接続法節>

[Vul]: **videte** **ne** turbemini (Cf. [D-R]: ‘See that ye be not troubled.’) <接続法節>

willan ('will, wish')

- だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。(これこそ律法と預言者である。)(7:12)

- [WS]: Eornustlice ealle þa þing ðe ge **wyllen** þæt men eow *don*. doþ ge him þæt sylfe.
(‘Therefore all the things that ye will that men do to you, do ye the same to them.’) <接続法節>
- [Wyc]: Therfor alle thingis, what euere thingis 3e **wolen** that men *do* to 3ou, do 3e to hem, <接続法節>
- [Vul]: Omnia ergo quaecumque **vultis** ut *faciant* vobis homines et vos facite eis
(Cf. [D-R]: ‘All things therefore whatsoever you would that men should do to you, do you also to them.’) <接続法節>

willan (‘will, wish’)

- イエスは立ち止まり、二人を呼んで、「何をしてほしいのか」と言われた。二人は、「主よ、目を開けていただきたいのです」と言った。(20:32-33)

- [WS]: þa stod se hælend and clypode hig to him and cwæð; Hwæt **wylle** gyt þæt ic inc *do*; Ða cwædon hig. drihten þæt uncre eagan *sin* ge-oponede;
(‘Then stood the Saviour and called them to him and said, What will ye both that I do to you both? Then said they, Lord, (we both will) that the eyes of us both be opened.’)
(<接続法／直説法節>) <接続法節>
- [Wyc]: And Jhesus stood, and clepide hem, and seide, What **wolen** 3e, that Y *do* to 3ou? Thei seien to him, Lord, that oure i3en *be* opened. (<接続法／直説法節>) <接続法節>
- [Vul]: et stetit Iesus et vocavit eos et ait / quid **vultis** ut *faciam* vobis / dicunt illi / Domine ut *aperiantur* oculi nostri
(Cf. [D-R]: ‘And Jesus stood, and called them, and said: What will ye that I do to you? They say to him: Lord, that our eyes be opened.’) (<接続法／直説法節>) <接続法節>

<形容詞>

betera (‘better’)

- (もし、右の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。) 体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。(5:29)

- [WS]: Soðlice þe ys **betere** þæt an þinra lima *forwurpe*. þonne eal þin lichama si on helle asend;
(‘Truly it is better for thee that one of thy limbs perish than all thy body be sent away into hell.’)
<接続法節>
- [Wyc]: for it **spedith** to thee, that oon of thi membrs *perische*, than that al thi bodi go in to helle.
<接続法節>
- [Vul]: **expedit** enim tibi ut *pereat* unum membrorum tuorum / quam totum corpus tuum mittatur in gehennam
(Cf. [D-R]: ‘For it is expedient for thee that one of thy members should perish, rather than that thy whole body be cast into hell.’) <接続法節>

betera (‘better’)

- (もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。) 体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。」(5:30)

[WS]: Witodlice þe ys **betere** þæt an þinra lima *forwurðe* þonne eal þin lic-hama fare to helle;
(‘Truly it is better for thee that one of thy limbs perish than all thy body go to hell.’) <接続法節>

[Wyc]: for it **spedith** to thee that oon of thi membris *perische*, than that al thi bodi go in to helle.
<接続法節>

[Vul]: **expedit** tibi ut *pereat* unum membrorum tuorum / quam totum corpus tuum eat in gehennam
(Cf. [D-R]: ‘for it is expedient for thee that one of thy members should perish, rather than that thy whole body go into hell.’) <接続法節>

betera (‘better’)

- (もし片方の手か足があなたをつまずかせるなら、それを切って捨ててしまいなさい。) 両手両足がそろったまま永遠の火に投げ込まれるよりは、片手片足になっても命にあずかる方がよい。(18:8)

[WS]: **Betere** þe ys þæt þu *ga* wan-hal oþþe healt to life. þonne þu hæbbe twa handa and twegen fet.
and sy on ece fyr asend;
(‘It is better for thee that thou go maimed or lame to life than thou have two hands and two feet, and be sent away into eternal fire.’) <接続法節>

[Wyc]: It is **betere** to thee to entre to lijf feble, ethir crokid, than hauynge twayne hoondis or tway feet to be sent in to euerlastynge fier. <不定詞句>

[Vul]: **bonum** tibi est ad vitam ingredi debilem vel clodum / quam duas manus vel duos pedes habentem mitti in ignem aeternum
(Cf. [D-R]: ‘It is better for thee to go into life maimed or lame, than having two hands or two feet, to be cast into everlasting fire.’) <不定詞句>

B. 命令的接続法／直説法過去 (本文中の 3.2. で割愛した例)

<動詞>

(be)beodan (‘command’)	16:20 (<i>sædon</i>), 20:31(<i>suwodon</i>)
biddan (‘ask, pray’)	8:34 (<i>ferde</i>), 14:36 (<i>æthrinon</i>)

bebeodan (‘command’)

- それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。(16:20)

[WS]: Ða **bebead** se hælend hys leorning-cnihtum þæt hig nanum menn ne sædon þæt he wære hælend crist;
(‘Then the Saviour commanded his disciples that they should not tell any man that he were the Saviour, the Christ.’) <接続法／直説法節>

[Wyc]: Thanne he **comaundide** to hise discipulis, that thei schulden seie to no man, that he was Crist.
<法助動詞節>

[Vul]: Tunc **praecepit** discipulis suis ut nemini *dicerent* quia ipse esset Iesus Christus
(Cf. [D-R]: ‘Then he commanded his disciples, that they should tell no one that he was Jesus the Christ.’) <接続法節>

beodan ('command')

- 群衆は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。(20:31)

[WS]: Ða **bead** seo menegu him þæt hig sūwodon.

(‘Then the crowd commanded them that they should be quiet.’) <接続法／直説法節>

[Wyc]: And the puple **blamede** hem, þat thei schulden be stille; <法助動詞節>

[Vul]: turba autem **increpabat** eos ut *tacerent*

(Cf. [D-R]: ‘And the multitude rebuked them that they should hold their peace.’) <接続法節>

biddan ('ask, pray')

- (すると、町中の者がイエスに会おうとしてやって来た。)そして、イエスを見ると、その地方から出て行ってもらいたいと言った。(8:34)

[WS]: and þa þa hig hyne gesawun þa **bædon** hig hyne þæt he ferde fram heora gemærum;

(‘and when they saw him, they prayed that he should go from their boundary.’) <接続法／直説法節>

[Wyc]: and whanne thei hadden seyn hym, thei **preieden**, that he wolde passe fro her coostis.

<法助動詞節>

[Vul]: et viso eo **rogabant** ut *transiret* a finibus eorum

(Cf. [D-R]: ‘and when they saw him, they besought him that he would depart from their coasts.’)

<接続法節>

biddan ('ask, pray')

- その服のすそにでも触れさせてほしいと願った。(触れた者は皆いやされた。)(14:36)

[WS]: and hyne **bædon** þæt hig huru-þinga his reafes fnæd æthrinon

(‘and prayed him that they should at least touch the hem of his garment.’) <接続法／直説法節>

[Wyc]: And thei **preieden** hym, that thei schulden touche the hemme of his clothing; <法助動詞節>

[Vul]: et **rogabant** eum ut vel fimbriam vestimenti eius *tangerent*.

(Cf. [D-R]: ‘And they besought him that they might touch but the hem of his garment.’) <接続法節>

以上。